



自然科学書協会会報

NSPA JAPAN

THE NATURAL SCIENCE PUBLISHERS' ASSOCIATION OF JAPAN

発行人 | 金原 優
編集 | 広報委員会

■ 自然科学の時間—雑草生態学

雑草を学ぶ 雑草に学ぶ

静岡大学大学院教授 稲垣栄洋

■ 専門委員会報告(第63期・64期事業総括)

■ 第64期第2回定時総会・会員集会の報告

■ 自然科学書協会講演会2015のご案内^{ほか}

2015.7.1 NO.3 (通算 77号)

一般社団法人 自然科学書協会 | 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-101 | 神保町 101 ビル 1 階 | TEL 03-5577-6301 | <http://www.nspa.or.jp/>



静岡大学大学院教授 稲垣 栄洋

雑草を学ぶ 雑草に学ぶ

● 自然科学の時間—雑草生態学 ●

雑草をはじめ、昆虫など身近な生き物をテーマに、一般にもわかりやすく、ユーモアも交えて興味深い生態を紹介した著書を数多く執筆

● 雑草学とは？

私は「雑草学」を専門にしている。そう言うと、一般の方からは「そんな学問があるのですか？」と驚かれることが多い。古来、農業は雑草との戦いであり、作物生産を行ううえで、雑草を防除することは極めて重要である。また、道路や河川、公園等の緑地管理を行う上でも雑草防除は欠かせない。雑草学(Weed science)は、雑草防除のために、雑草の生態を明らかにし、管理技術を開発する、農学の中では重要な学問分野なのである。もちろん、雑草を研究している研究者は世界中にたくさんいるし、国内にも海外にも学術的な雑草学会があり、日夜、研究が続けられている。それでも、一般の方が、「雑草学」という言葉を聞いて奇妙に感じるのは、雑草という言葉に「雑草魂」や「雑草軍団」という人間臭いイメージがあるからだろう。

「雑草」という植物群は人間活動を阻害する邪魔者である。しかし、不思議なことに、日本人は雑草を邪魔者扱いしながらも、「雑草」という言葉にポジティブなイメージも抱いてきた。困難を乗り越え、成功を成し遂げた無名の努力家は、ときに「雑草」と称賛される。「温室育ちのエリート」と言われるよりも、「雑草」と呼ばれる方が、どこかうれしい気がしないだろうか。ただし、国際学会に出席するたびに各国の方々に聞いているが、今のところ日本ほど、「雑草」という言



イネの重要な害虫であるアカスジカスミカメは、意外なことに雑草を刈るとその数を増やしてしまう

葉を良い意味で使う国を私は知らない。英語でも、人を評するときに「雑草」という言葉を使うときがあるが、それは、よほどの嫌われ者を指している。「あなたは雑草のような方ですね」とは、海外では決して言うてはいけない言葉なのだ。

● 人間社会とも共通する生存戦略

「雑草」という言葉は、一般の方にもなじみのある言葉ということもあるのだろう。「雑草学を専門にしています」と言うと、「どうして雑草の研究を始めたのですか？」と質問されることも多い。

私は、学生時代には作物学を専攻していた。ところが、ある時、研究で栽培している作物の傍から、奇妙な植物が生えてきた。指導教官に名前を聞いたところ、「花が咲けば図鑑で調べることができから、花が咲くまでそのままにしておきましょう」と言われた。何しろ、作物はどのように成長するか教科書にも書いている。しかし、その植物がどのよう

な花を咲かせるのか、まったく予想もつかない。こうして、毎日、観察を続けているうちに、いつしか私の興味は研究材料であった作物よりも、傍らの雑草へと移っていったのである。そして、私は大学院に進み、本格的に雑草を研究することになった。ところが、こんな言い方は科学者として適当ではないことは承知しているが、科学的に研究すればするほど、雑草は人間臭い雑草魂を感じる存在だったのである。

農地や道ばたなど予測不能な変化が起こりやすい環境に生える雑草は、一般の植物に比して、環境に対して適応し、変化をする可塑性が大きい。そして、どのような環境であっても種子を生産するという植物の最終目的に対して、ベストなパフォーマンスを見せるのである。私がこのような雑草の生存戦略を本等で紹介すると、興味深いことに、経済学者やマーケティング研究者、企業経営者など、まったく異なる分野の専門家が、「なるほど腑に落ちた」と反応してくださる。人間も自然界の生物の一つであるから、雑草の生存戦略も、人間の社会活動も奥深いところでは、共通しているのかも知れない。

●酪農や品種開発の分野にも生かされる雑草学

「最終目的が変化しないから、自在に変化することができる」。この雑草の戦略の真髄を目の当たりにしたことは、実

際に私の人生にも少なからず示唆を与えてくれた。

「雑草学が専門」と自称する私だが、実際に雑草だけを専門に研究した期間は短い。

大学院を出た後、最初の職場は霞ヶ関の農林水産省であったし、その後、県の公的研究機関でサラリーマン研究者となった私は、与えられるままにさまざまな研究テーマに取り組んできた。最初に書いた論文は酪農に関するものであったし、その後、組織培養の研究を行ったり、品種開発をしたり、植物病理や害虫の研究も行った。しかし、環境を選ぶことはできないが、環境に適応して変化する雑草に見習って、いずれの場面でも私は得意の雑草学を生かしながら研究をしてきたのである。酪農の研究では、牧草地の雑草を防除し、牧草の生産性を高めることができたし、品種開発の研究では雑草性のある系統を育種親として、短い時間で花が咲く花の品種を開発した。また、植物の病原菌や害虫は雑草を増殖源や中間宿主とするものも多い。そこで、雑草を適切に管理することによって、病原菌や害虫を防除することもできたのである。振り返ってみれば道草を食ってばかりの研究人生だったが、今にして思えば、どんな分野の研究も、どんな仕事も、今の私を作るのに役立たなかったものはない。さまざまな研究領域に触れることができたのは、私にとって大きな財産であ

る。端から見れば、あっちへ行ったりこっちへ行ったりしているように見えるかも知れないが、私にとっては、今の私につながるまっすぐな道であった。

●「深い谷」に新しい発見がある

このように、さまざまな研究領域を渡り歩いた私を感じるのは、「山が高いほど、谷も深い」ということである。

学問は、専門が細分化し、それぞれの領域で知見が蓄積されている。研究が進めば進むほど、分野はさらに細分化し、深化していく。しかし、研究が進んで山が高くなればなるほど、一方では、その研究領域の間の谷は深くなっていく。同じ現象や同じ物を指しているはずなのに、学会が異なると使用している専門用語や定義が異なってしまうことも少なくない。それぞれの山が十分に高くなった今日、この深い谷に新たな研究テーマがあるように思える。「学際的」といえば、すでに使い古された言葉かも知れないが、たまには、山と山の間にある谷をのぞいてみたり、谷に降りてみるのも悪くはないだろう。

私がそれを強く認識したのは、静岡県の研究プロジェクトに取り組んだときのことである。静岡県には学際的なテーマで、研究チームを作り、課題を解決するというユニークな制度があり、その中で、私は三つのプロジェクトチームを経験した。研究チームのメンバーは同じ事象を見ているはずなのに、見えているものは

まるで違う。そこで感じたのが、谷の深さだったのである。

たとえば、私は雑草研究者として、さんざん雑草を見てきたつもりだが、他の研究者は雑草についての虫や菌に着目する。確かによくよく見てみれば、雑草は単独で存在しているわけではない。どんな雑草も必ずと言っていいほど、葉っぱのどこかを害虫に食べられているし、病原菌が感染した病徴もある。雑草を見ているつもりでも、私には雑草しか見えていなかった。私には目の前に起こっている現象が正しく見えていなかったのである。

あるいは、こんな例もある。草刈りをすることは雑草を管理する上では、基本的な作業である。ところが、害虫に視点を向けると、草刈りをすればするほど害虫が増えるという現象が観察された。草刈りをすればするほど、草刈りに強い雑草が優占する。この草刈りに強い雑草が害虫の餌となっていたのである。

一方、昆虫の研究者は、特別な食草を除けば「雑草」を一括りに捉えることも多い。たとえば、イネ科雑草を餌とするという害虫を調べてみると、その害虫にとっては、イネ科雑草の中にも好き嫌いがあることがわかった。すべての雑草を駆除することは不可能に近いが、一部の雑草だけであれば防除は可能である。そして、特定のイネ科雑草だけを防除することによって、対象害虫を効果的に抑制することが可能となったのである。

いずれも視点を少しずらしたただけだが、私にとつては目からうろこが落ちるような衝撃的な発見であった。

すべての自然界の現象は切れ目なくつながっていて、そして複雑に関係しあっている。科学はその仕組みを理解するために、分野を分けて、自然界の現象を切り取って研究している。そして、知見が積み上げられて山は高くなってきた。しかし、山から谷を見下ろしてみれば、見慣れた研究テーマにも、新しい発見がある。まさに、その谷は、まばゆいばかりの宝が埋もれているのである。

稲垣 栄洋（いながき ひでひろ）

1968年静岡市生まれ。岡山大学大学院修了。農学博士。農林水産省、静岡県職員を経て、現在、静岡大学大学院教授。専門は雑草生態学。主著に「静岡県 田んぼの生き物図鑑（共著）（静岡新聞社）」「雑草に学ぶルデラルな生き方（亜紀書房）」「都会の雑草、発見と楽しみ方（朝日新書）」「地域の植生管理（農山漁村文化協会）」等、多数がある。

専門委員会報告 （第六三期・六四期事業総括）

◎販売・出展委員会

自然科学書の普及が、当委員会の役割です。そのための大きな活動として、「東京国際ブックフェア」におけるブース出

展、「自然科学書フェア」を毎年一回以上中核書店で開催することがあげられます。さらに海外での普及のため、北京およびフランクフルトで開催される国際ブックフェアへ出展しています。

●東京国際ブックフェアは、全体としては出版社の参加が減少傾向にあり、電子出版への関心から、その方面への対応も多く見られます。そのなか、当協会は三・五ブースを確保して出展しています。二〇一四年は会員六二社に加え会員外からも三社の参加があり、二、五・三六冊を出品し、前年を上回る売り上げを得ました。現在開催中の同フェア二〇一五も昨年と同様規模の展開となっています。残念ながら、外国語への翻訳問い合わせは低調です。

●自然科学書フェアは、二〇一四年は一〇月一日（水）～三十一日（金）まで、喜久屋書店小倉店で開催され、会員社四四社八五八点の参加がありました。今回は現地で喜久屋書店各店舗担当者と協会会員社との意見交換会が持たれ、有意義でした。

本年は六月三日（水）～八月二日（日）の会期で、京都駅前の大垣書店で開催されています。国際土壌年であることを受け「土壌」のコーナーを特設しています。

●海外での展開 北京国際図書展示会二〇一四は八月二七日（水）～三十一日（日）に開催されました。会員社の出品を促すため、協会から一社一〇冊まで一冊一、

〇〇〇円の補助金を出しました。二三社から二九一冊の出品があり、三ブースを確保して展示し、積極的に紹介しました。フランクフルトブックフェア二〇一四は一〇月八日（水）～一二日（日）まで開催されました。当協会からは一九社四六点が出品され、出版学会、大学出版部協会とともに、日本共同ブースに展示されました。

（販売・出展委員長 筑紫恒男）

◎広報委員会

広報委員会の役目は会報の発行、自然科学書協会講演会、当協会の活動並びに存在意義を広くPRする三事業です。この事業を三つの小委員会制で運営しました。

会報は年四回発行しました。新たな試みとして、組版と印刷を同じ業者に一本化し作業の円滑化を図り、製作コストを削減しました。またレイアウトも変更しました。各号に編集長を選定し、編集長が目次構成や執筆陣を企画し、各号個性に富んだ内容となりました。

講演会は、従前は違う分野の講師二名によるものでしたが、それを一名にして、その分講演時間を長くし、講演内容を充実させました。二〇一四年は小泉武夫先生による発酵食品の話で、定員オーバーとなる応募者数でした。ユニークな講演で好評を得ました。今年は八月三〇日（日）に開催します。詳細は別掲をご参照いただき、多数のご参加を切望いたします。

ます。

PR活動は、業界紙への名刺広告の投稿や当協会のホームページ等への活動情報掲載をしました。

最後に宮部担当常務理事には大所高所から色々ご助言をいただきました。また、会報の各号の編集長（遠矢氏、竹西氏、松田氏、柴野氏）、大井講演会委員長、松田PR小委員長には、自社の仕事で多忙にも関わらず寛大なボランティア精神で期待以上の職務を果たしていただきました。その他の委員（別掲）にも多大なご尽力を賜りました。素晴らしい委員に恵まれました。衷心より敬意と感謝を申し上げます。

（広報委員長 牛来真也）

◎著作・出版権委員会

現在、紙媒体からの複写への許諾対応はかなり進んでいます。PDFなどの電子ファイルへの複製許諾に対応しなければならなくなりました。したがって当協会としては一般社団法人出版者著作権管理機構（以下JCOPY）の使用料規程の改定（二〇一五年四月一日から施行）に協力いたしました。これにより許諾の対象を電子ファイルへの複製まで広げることができるようになりました。また、利用契約の促進も推していますが、当協会会員社も複製物の利用者としてJCOPYと利用契約を結ぶよう努力すべきと考えます。

また、「著作権法の一部を改正する法

「律」が第一八六回通常国会において、二〇一四年四月二五日に成立し、同年五月一四日に公布されました。これに伴い、一般社団法人日本医書出版協会の協力を得て出版契約書のひな型を会員社にご提示し、各社の状況に合わせて利用できるようにする予定です。

なお、大きな問題として当協会としては日本の複製管理団体が鼎立状態になっていることへの危惧を持ち続けています。利用者の利便性などを考慮して、これらを一本化するべきとするのが当委員会での一致した考えです。このことをJCOPYを通して公益社団法人日本複製権センター（以下JRRCC）に働きかけています。すなわち、JRRCCの使用料規程の改定が必須と思われる、これを申し入れていきます。

（著作・出版権委員長 及川 清）

◎研修委員会

研修委員会は会員社に対する研修会や、一般読者を対象としたサイエンスカフェの開催を通して、会員社には有益かつ必要な情報提供を、一般読者にはさらなる自然科学関連知識の普及および啓蒙ができるよう活動しております。

任期中に研修会を二回、サイエンスカフェを一回開催させていただきました。

まず、会員研修会として国立国会図書館参観を国会図書館利用者サービス部の吉間様アテンドのもと、二〇一三年一月一四日（木）（参加者一七社二四名）

と二〇一四年五月二八日（水）（参加者一七社二四名）に開催いたしました。

第六四期に入りまして二〇一四年六月二三日（日）三省堂書店との共催で、講師に浦島克佳・東京慈恵会医科大学教授、コーディネータに保坂直紀・東京大学海洋アライアンス上席主幹研究員を迎え、「グローバルヘルスとリーダーシップ」と題したサイエンスカフェを開催いたしました。事前申込者は二六名のところ、天候不良のため当日参加者は一四名となりました。しかし、講演後の質疑応答は大変活発で終了時間を忘れるほど盛り上がり、まさにサイエンスカフェのコンセプト（喫茶店の打ち解けた雰囲気の中で、自然科学の研究者と皆様が最先端の話題について語り合い、そして会話の中で素朴な質問や意見が飛び交う）に合った会になったかと思えます。

引き続きサイエンスカフェの企画は三本ほど進めておりましたが、残念ながらスケジュール等の都合で来期の開催となりました。

研修委員会の活動は会員社のニーズを把握し、いかに伝達できるかが成否の力になると考えられます。今後とも研修委員会をよりよくお願い申し上げます。

（研修委員長 曾根良介）

◎総務委員会

第六三・六四期の総務委員会は、飯塚担当常務理事・吉野副委員長・古谷委員・私の四名で活動を行って参りました。「常

務理事会および各専門委員会が担当しない部分のほとんどを担当する委員会」との別名があるように、ありとあらゆる業務を行いました。

その活動を振り返ると、決算および予算案の策定、事業計画・事業報告の集約、定款や諸規定に従った庶務関係および会計事務の処理、和文および英文会員名簿の作成、年末懇親会の開催、総会・会員集会・理事会などの運営に関わる諸業務、出版・印刷人の集いおよび出版平和堂への参加等があげられます。なかでも予算の策定は、限られた資産内で、公益目的支出計画に則った支出を果たさなければならぬため、胃の痛むようなギリギリの駆け引きが要求されたことが思い出されます。

そんなあつという間の二年でしたが、無事に任期を終えることができたのも、若輩且つ浅学の委員長を支えてくださった委員会メンバーと事務局高山さんのご活躍の賜です。心より感謝申し上げます。

総務委員会の活動は、理事会や事務局との連携を密にすることはもちろん、会員社の声を吸い上げることが協力を円滑に活動させるための秘訣と考えます。そのためにもお気づきの点がございましたら総務委員会もしくは事務局へお声掛けください。引き続き次期総務委員会および事務局への変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

（総務委員長 長 滋彦）

◎税制・再販流通特別委員会

今年一〇月一日に予定されていた消費税率一〇％への変更は二〇一七年四月まで延期されましたが、それでも再販制度、商品定価表示、年間購読等固有の流通制度を持つ出版物においては前回八％への移行時の経験を基に、今から二〇一七年に向けて準備をしておかなければなりません。特に国民の出版物離れが益々深刻となってきた現在、消費税率変更の混乱は出版業界にとって更なる足かせとなる危険性を孕んでおり、慎重かつ適切な対応が求められます。勿論これは自然科学系の専門書に限った問題ではありませんが、一部の専門出版物にはいわゆるロングテール現象が見られ、旧税率あるいは旧々税率、さらにそれらに基づく定価表示が行われているものについての対応が重要です。

現在出版界全体では、税率変更時に導入を目指している出版物への軽減税率適用問題に取り組んでいます。欧米の多くの国では、国民の知の源泉である出版物に対する軽減税率が適用されており、日本でも税率が上がるにつれて、その必要性和重要性に対する認識が高まってきています。出版物が提供する知識と情報は食料品や公共交通と並んで生活必需品としての役割を持っており、特に自然科学系の専門書は科学立国日本を発展維持させるために不可欠であることから、消費税によってその販売に影響が出ることが

あつてはならないものです。この四月に出版界は著作者団体と協力し「出版文化に軽減税率適用を求める有識者会議」を立ち上げ、本格的な活動を開始しました。しかし、どこまでを軽減税率の適用範囲とするのかについては未だ明確ではなく、その線引きには早急な対応が求められます。また経理処理、仕入にかかる消費税処理ならびに税還付問題等についても検討する必要があります、新税率施行まで残り二年を切った段階でその達成に向けて検討しなければならぬことが山積しています。当委員会ではこれらの問題に取り組んでいきたいと思っています。

(税制・再販流通特別委員長 金原 優)

自然科学書フェア二〇一五

当協会主催の「自然科学書フェア二〇一五」を六月三日(水)～八月二日(日)まで、京都駅前にある大垣書店イオンモールKYOTO店にて開催しています。会員社から四二社三、三九八冊、農書協会会員社から九社四〇四冊の出品をしています。メインテーマを『科学立国日本を支える自然科学書の力』と掲げ、理学・工学・農学・医学・家政学と分野別に棚構成を行い、テーマ別の棚も設置しています。

今年に国連が提唱している「国際土壤年」であることから、特別台を設け、農

業書協会の協力を得て関連書を集めました。また、タキイ種苗株式会社の協力を得て、種の展示等も行っています。

大垣書店本店、イオンモール京都桂川店、フオレオ大津一里山店にても、「科学読み物」、「天文・地学書」、「独学・再入門のススメ」、「いろんな図鑑」の小フェアを同時開催しています。

サイエンスカフェは会期中二回行い、

第六四期委員会開催一覧

(二〇一五年四月～五月)

●理事会

・四月一六日(木)／一五時～一七時

日本出版クラブ会館

・五月二二日(木)／一四時～一五時三〇分

日本出版クラブ会館

●常務理事会

・四月一三日(月)／一一時三〇分～二時三〇分

文化産業信用組合

●専門委員会

・四月一四日(火) 広報委員会／一七時～一八時

コロナ社

・四月一七日(金) 著作・出版権委員会／一五時～一七時

日本出版クラブ会館

・五月一四日(木) 研修委員会／一六時～一七時

日本出版クラブ会館

●その他

◆五月一日(月) 全出版人大会がホテルニューオータニで開催されました。

■事務局だより

〈当会代表者の変更〉

●株式会社 オーム社

旧代表者…竹生修己

新代表者…村上和夫

●株式会社 岩波書店

旧代表者…宮部信明

新代表者…桑原正雄

●株式会社 杏林書院

旧代表者…太田 博

新代表者…太田康平

●株式会社 彰国社

旧代表者…後藤 武

新代表者…下出雅徳

●東海大学出版部

旧代表者…安達建夫

新代表者…橋本俊明

〈代表者/当会代表者の変更〉

●株式会社 金芳堂

旧代表者…市井輝和

新代表者…宇山閑文

●株式会社 協同医学出版社

旧代表者…木下 攝

新代表者…中村三夫

●株式会社 文光堂

旧代表者…浅井宏祐

新代表者…五十嵐正雄

新当会代表者…浅井麻紀

〈専門委員会委員の変更〉

販売・出版委員会

●海文堂出版株式会社

旧委員…當山巨人 新委員…登録なし

〈フアックス番号変更〉

●株式会社 同文書院

旧フアックス 〇三―三三八―二一八四五六

新フアックス 〇三―三三八―二一五一五二

■第三期/第六四期広報委員 〈担当常務理事〉

宮部信明(岩波書店)

〈委員長〉 牛来真也(コロナ社)

〈委員〉 柴野 豊(家の光協会)

桑原正雄(岩波書店)

竹西素子(オーム社)

稲沢 会(共立出版)

矢吹俊吉(講談社サイエ

ンティフィク)

大井隆之(コロナ社)

松田和貴(電気書院)

遠矢良太郎(南江堂)

増田素美(丸善出版)

編集後記

家庭菜園の雑誌を作っていることもあり、自らも狭いながら畑を借りて、野菜を作っています。特にこの季節、野菜以上に元気なのが「スギナ」です。刈っても抜いても次々と出てくるしぶとい雑草ですが、今号の「自然科学の時間」をご執筆いただいた稲垣先生の著書にこんな話が紹介されています。原爆を落とされた広島で、真っ先に緑を取り戻したのが、このスギナでした。緑が戻るのに五〇年かかるといわれた地に芽吹いたスギナは、どれだけ人々の心を勇気づけたことかと、復興のシンボルの評価を与えられています。スギナに限らず、雑草は畑の厄介者として扱われてきましたが、最近はおえて畑を耕さず、雑草を生やしながら野菜を育てる「不耕起栽培」を実践する農家も現れています。今後は、さまざまな面で雑草の存在が見直されてくることでしょう。今回、初めての会報編集に右往左往しながら、雑草のしぶとさと適応力を羨ましく感じずにはいられてみました。(Y・S)



フェア会場風景

第一回目は六月二〇日（土）に京都府立大学の矢内純太先生に「農業と環境の基盤としての土壌―国際土壌年に考える―」と題してお話をいただきました。第二回目は七月二五日（土）に京都市動物園生き物・学び・研究センターの田中正之先生に「生まれ変わる動物園」と題してお願いしています。

（販売・出展委員会 諸星安紀）

第六四期第二回定時総会・ 会員集会の報告

五月二二日（木）一六時より日本出版クラブ会館において第六四期第二回定時総会が開催されました。金原理事長は冒頭、「先の一年間に電子出版権の創設やJCOPYの電子化許諾、消費税率変更の一年先送りなど大きな動きがあった。また、軽減税率の動きも出ている。協会としてもこうした動きを注視しつつ、科

学技術発展の役割を担う研究者に有益なものを流通させ、展開していくことを積極的に行っていききたい」と挨拶されました。

定款に基づき金原理事長が議長に就任し、総会が開会となりました。議長は出席二七社、委任状出席三〇社、合計五七社の出席により総会開催に必要な定足数が確保された旨を会場に報告し、議案の審議へと移りました。

第一号議案「第六五期事業計画書承認の件」は飯塚総務担当常務理事より、第二号議案「第六五期収支予算書承認の件」は長総務委員長より、第三号議案「定款変更の件」は南條専務理事より報告・説明が行われ、いずれも賛成多数により承認されました。これを受け議長は閉会を宣言しました。長選挙管理委員長から役員選挙のお知らせがなされた後、南條専務理事の挨拶によって総会は終了となりました。



会場全体風景



議長を務める
金原 優 理事長



閉会の挨拶をする
南條光章 専務理事

引き続き第六四期第四回会員集会が開催されました。販売・出展委員会（筑紫委員長）、広報委員会（牛来委員長）、著作・出版権委員会（梅澤副委員長）、研修委員会（曾根委員長）、総務委員会（長委員長）、税制再販委員会（金原委員長）の順に、現在進行中の案件やお願い事などの報告が行われ、一七時二〇分に総会および会員集会は閉会となりました。

（総務委員長 長 滋彦）

自然科学書協会講演会二〇一五 のご案内

今年も自然科学書協会講演会を八月三〇日（日）に開催いたします。時間は一五時から一六時四〇分まで、場所は日本出版クラブ会館（東京都新宿区袋町六）



講師を務める池谷裕二先生

三階「鳳凰の間」となっており、聴講は無料です。なお、昨年と場所が変わっておりますのでご注意ください。

講師は東京大学教授の池谷裕二先生にお話をいただきました。講演のテーマは「脳を知って、脳を活かす」となっています。著作も多く、テレビでも活躍する池谷先生が、脳にまつわるお話をわかりやすく講演される予定です。会員社の皆さまのお越しをお待ちしております。また、友人、知人、関係者の方など多くの方に告知いただけますようお願いいたします。お申込方法は、自然科学書協会のホームページ（「自然科学書協会」を検索してください）のトップページにあるバナーをクリックして申込ページへ移動し、必要事項をご記入ください。QRコードから、直接申込ページを開くこともできます。席に限りがありますので、お早めにお申し込みください。多くの皆様のご来場お待ちしております。



（広報委員会 大井隆之）